
神の力の箱ですか。

紅 もみじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の力の箱ですか。

【Zコード】

Z0142X

【作者名】

紅もみじ

【あらすじ】

両親の死によりこの世に絶望していた瀬川辰巳は、高校の帰り道にいきなり不審な男に連れ去られ、見知らぬ土地へ。話を聞くと彼の中には神の力があるらしい。もう戻れないことを伝えられた彼は、この世界に馴染むために学校に通うことになった。* 同姓愛の認められた世界での王道学園＆国に護衛される生活。* 辰巳君は無自覚イケメンです。

プロローグ？

さあ、この状況を誰か俺に分かるように端的に説明してくれ。

どこだかわからぬ、日本とも思えない、暗い神殿。神を彷彿とさせる石像や装飾の数々。ステンドグラスの嵌め込まれた崩れかけの石壁からは、多色な光以外にも疎らな光が差し込んでいる。

俺の記憶では、いまは辺りも暗くなる时刻の筈なのだが、この理解不能地域には通じない様だ。本当に誰か説明してほしい。

俺が鉄製の鳥かごに入れられて、美形軍団から見つめられるはめになつた理由を。

今日も快晴。

9月上旬の残暑の色濃く残る季節。雲ひとつ許さずに晴れ渡つた空に、俺はためにためた空気を吐き出した。

現在、時刻は午後の3時を少し回つた。部活のない者は帰路に着く。俺もその一人な訳で、本屋に寄つて帰るつもりだ。家に長居するのはいまの俺の心理状況的に厳しい物がある。とりあえず、そうして家に帰つて、何だか寂しくなつた我が家にじこ対面する。そう言ういつもと変わらない一日を、無意味に終えるはずだつた。

そう、筈だつた。

本屋に出来るだけ居座つた帰り道。外は完全に闇が降りついて、駅までの道のりを街灯頼りに歩いていた。

これも最近となつてはいつものこと。両親との思いでのつまつたあの家には、もう俺の居場所はない。

1ヶ月経つただろうか。俺にとつての唯一気の置けない存在、母と父が交通事故でこの世を去つたのは、はつきりいって自爆だつた。目撃者の証言によると、飛び出してきた野良猫を避けようとした

て脇に停車していた軽油トラックに激突。大破、炎上し、コースにもなった。

最後までお人好しだ。猫のために命をなくしたのだから。「人は優しく他人に厳しく」を実現できる人たちだった。俺は自分の親として、誇りに思う。

両親そろって腐っていたのが玉にきずだが。そのおかげで無駄な知識が入ってしまった。

否、断言するが俺は腐ってない。断言する。無駄に知識があるだけだ。家にふつうに転がっている物だから。小さい頃はそれが何なのか分かつてなかつたしな。分かつてからは見なくなつた。

両親の他界後、俺たちの家には、今まで祖母と同居していたおばさん夫婦が、俺の面倒を見ると言う建前で引っ越してきた。しかしその実は、それなりに裕福だった家の資産を、義理の親としてもらい受けたこと。彼らの瞳に俺は写つていない。その欲に汚れた瞳に映るのは、お金ばかりだ。

だから、俺には居場所がない。

自分でもうつになるんじゃないかと思つことを考えながら、一つ、角を左に曲がつた。徐々に細くなつていく道に街灯は申し訳程度にしかなく、人通りも皆無だ。

あと角を一つ曲がつて、駅から電車に乗つてしまえばすぐに家についてしまう。あんなに早く帰りたかった頃が、幻想であつたような気さえする。

俺は見えてきた角を今度は右に曲がつた。

「お前か、辰巳つてのは」

「え？ つ！？」

突然の背後からの声に両手を捕まれ、壁につつ伏せに叩きつけられた。とつさのことで反応が遅れてしまつたが、一応仕返しとして、近づいて来た気配のあつた後頭部後ろにあるだらう頭に向かつて、頭突きをお見舞いする。ガスつと鈍い音がして、男のうめく声が聞こえた。

それでもつかんでいる腕は緩めることはない。俺は舌打ちをした。めつきり勝負を挑んでくるやつがいなくなつたと思つていたら、随分強いやつが来たじゃないか。

「なにすんだよ、いてえじやねえか」

たいしてダメージを食らつていないくせに、一丁前に文句をいつてきたその男は、俺の手を押さえつけているのとは反対の手で頭を押さえてきた。

「 つ

冷たい壁がじかに頬を冷やす。

なんだよこいつは。流石にこんな体育系っぽい体格の男じゃ、力で勝てない。真つ暗で顔も見えないから過去にやつたことがあるのかないのかわからないし。あつたとしてもいまの状況が変わるわけではないけど。

「ん？ ヘー綺麗な顔してんじやん。あーでもちやつちやと帰んねえとまずいか…惜しいなー」

人の顔を覗き込んで、ぶつぶつとけつたことをいつている男はあまり強面ではないようだった。あまりに近すぎて、押さえつけられる痛みに耐えながらでも顔の判別ができた。

見たことはない。確信できる。なんせ男の髪の色はマリモのよう

に濃い緑だ。痛みも忘れて吹くところだつた。

ただそれは男の方に引っ張られたことによつて阻止された。これはチャンスだ。動かされたことで拘束の解けた足で、体を捻つて回し蹴りを叩き込む。両手と頭を押さえられてもこれくらいはできる。ちょっと腕が変に曲がつた気はしないでもないけど。

「うおつと」

男は後ろに飛んで避ける。いい反射だ。残念。

すべての拘束が解けたことで、俺はそのまま一目散に逃げた。真剣にやれば勝てないことはないかも知れないが、意味がない。それに危険な橋は極力わたらないことにしている。叩くもの面倒だ。

「あ、おい！」

後方でどなる低い声に、おってきていないと察知する。よかつた。俺は安心して、少し早さを緩めてしまった、それが命取りだつた。

「逃げんなよ」

「！？」

今度こそ、俺は男の腕の中にいた。いつの間に追いついたのか。全く気づけなかつた。

「ほんとは使うのよくないんだよ、魔法はよおは？なんだつて大の男からそんなファンタジーな言葉を聞かなきやならないんだ。

もう意味がわからない。

「なんだよつ、離せ！」

「煩いなあ、黙つてろ」

その言葉のあとに、首の後に鈍い痛みを感じて、俺の意識は遠のいた。

プロローグ？（後書き）

初めまして。

ノリで書いてしまつている作者です（笑

誤字脱字等ありましたら、お知らせください。

プロローグ？

ここでは冒頭に戻る。

目を開けて、最初に映ったものは鉄格子だった。

現在俺は固いゴムのようなもので両腕を縛られた状態で、小さめの鳥がごに閉じ込められると言う羞恥プレイをさせられている。何がどうなったのか。

始めにもいつたが、誰か説明してくれ。

見たところ、神殿っぽいこの場所は体育館ほどの広さがある。本当に神殿なら、大広間とか講堂じゃないだろうか。

この俺の分析はRPGの知識を総動員した結果だ。伊達に高一でゲームオタ化しないよ。

あ、それで思い出した。俺の大切なゲーム機が入ったバッグ。： よかつた、ちゃんと肩にかかる。

ふつとなにげなしに正面を向く。誰かいないのか。

ステンドグラスの光が柔らかく、タイル張りの床に降り注ぐ。と、光と影のコントラストの合間に、誰かの足が見えた。

視線をそのまま上へと移動させる。そこには、飾りつきの中折れ帽を目深に被つた、軍服姿の男が立っていた。表情は読み取れない。「こいつが『神力箱』か？」

右側からの重い声に、反射的にそちらを見る。

きつと鋭い目で睨み付ける、きつめの女性と曰があつた。美青年過ぎて男かと思ったが…胸あるもんな。

つて何見てんだ俺は、こんな時に。

「まあ！美しい方じやあないですか！」

今度は左側から妙にテンションの高い女性の声。素直（？）に顔を向けた。

ゴスロリと称されるフリルがたくさんあるワンピースを着ている、

ピンクの長髪美少女だ。

美しいってあなたのことじゃないですか。

いつの間にか鳥かごの周囲には何人かが等間隔に並んでいた。俺を取り囲むかのように。

さすがに怖いんだけど。

後ろの見えない俺から三人がしつかりと見えるわけだから、他に3、4人は居るのだろうか。

「始める前に、ちょっとといいかな」

正面にいた帽子の男が、チョイと唾を押し上げていった。コツコツと靴をならして近づいてくる。

唾を押し上げたことにより、よく見えるようになった顔は、他にみたことがないくらい美しい。細い切れ目とくねった紫の髪が、それ以上無いほどの色気を醸し出していた。

「その格好、そそるね」

「!?

格子越しに目とはなの先にあつた美麗な男の顔に、驚いて身を引いた。帽子の彼はフツと妖艶に笑う。

俺は直視できなくて目線をそらした。

美形過ぎて気まずいのもあるが、大部分は真面目な恐怖からだ。自由にならないこの状態で、知らない、しかもちょっと危ない気がするこんな集団に囲まれたら、だれでも恐怖くらい持つ。

「儀式が終わつたら、私のもとにおいておくのもいいかも知りませんね」

「つ

伸ばされた手が首筋に触れた。

そのまま手は顎へと移動していく。遂には、クイと顎をあげられ、強制的に目をあわせられた。親指はなぜか唇の辺りを撫でていて、はつきりといって気持ち悪い。

背筋に嫌な汗が流れるのを感じた。

「怯えてるのかい？ 可愛いね」

男はまた妖艶に笑つ。『ひめ』ことひらは変態のよつだ。…また俺は関係の無いことを。

「まあいい。儀式が先だ」

男は今まで撫でていた指先を急に止め、爪を立てて首筋を一撫でした。

「…っ！？」

変な声が出そつになるのを必死に押さえれる。そんな優しく爪を立てないでくれ。

男はぐるりと向きを変えて、輪へと位置をもじり、

「始めよう

変わらぬ笑みで放つた。

プロローグ？（後書き）

ちょっと短めです。

帽子男が変態気味だと思いながら書いてました（笑

誤字脱字等ありましたらお知らせください。

プロローグ？

さあ、この状況を誰か俺に分かるように端的に説明してくれ。

なんか聞いたことあるような気がするセリフだろうが今はそんなことどうだつていい。

なぜ人が増える。

帽子の男が笑顔で云い放つた次の瞬間、ステンドグラスが砕けた。続いて壁の碎かれる音がする。

俺を取り囲んでいた美形たちはすぐさま周囲を見渡した。やがてちょうどおれの正面の位置（帽子男に重なつて見えない）を全員で見据える。

俺は少しでも見えるように体をそらした。

砕けたステンドグラスの散る中で、立っていたのはまたしても美形だった。

深い緑色のがつちりした服（軍服だろうか）に身を包んでいる、茶髪の好青年。異国風の装飾の施された剣を持つている。その後ろ。同じような格好をした人が十名前後。その中に一人髪の長い女性がいた。一人だけ、薄い緑の方の違う軍服を着ている。やはりきれいな人であった。

「意外に早かつたね、予想外だよ」

帽子の男は横顔をこちらに向けて流し眼をして言った。

美形なんだからそんなことしたら…ずるいよな。うらやましいよ。

「その子をこちらに渡してもらおうか

「断るよ」

「素直に聞くとは思つてない」

「なら聞かないでよ」

うわ、冷戦だ。見えないけど火花が散つてゐる。絶対。

「これじゃ儀式できねえじゃねえか。どうすんだ？」

俺の後方、つまり籠の後ろから声がした。これは…俺を連れてきたマリモの声。

「今日はあきらめるしかないね。ああは言つたけど儀式に必要不可欠なものだけを持って撤退しよう。彼はまた取り返すぞ」

そう言つて男はまた俺に流し目を送る。さつと目をそらした。さつきから儀式儀式つて、いつたい何なんだ。状況的に、絶対に俺に関係あるよね？何、生贊？だつたら俺不幸の極みだと思つ。「ひどいなあ」

すぐ近くから聞こえた男の声に、ぱつと顔を上げる。目の前に妖艶にほほ笑んだ美形さんがいてわずかに身を引いた。男の肩越しに見えた正面では、RPGのような大乱闘が始まっていた。皆剣や短剣を持つて戦つている。鉄砲はいないのか。そのかわり、ところどころでなにか紋様が光っていた。魔法だらうか。マリモも言つてたし。

「わつ」

いきなり男に肩を掴まれた。驚いて目を見開く。

「ちょっと我慢してね」

男は俺に見せつけるように群青色の大きな鍵をかざすと、それを思いきり俺の胸につきたてた。

「なつ！？」

男は変わらす妖艶に笑う。

妙な感じだつた。俺の体にとつぱりとつかる鍵の先端が見える。それなのにまつたく痛みを感じない。水面に棒きれをつっこんだ状態に似ている。俺の体はそれを受け入れているかのようだ。気持ち悪い。

男がにわかに鍵を回し出す。

なんだ？熱い。

男が鍵を回していくにつれて俺の体に熱がたまる。沸々とどこからともなく湧き上がるそれは、今までに感じたことがない熱量だつ

た。熱くて、苦しい。

「は
っ」

「あと少し」

燃えるように熱い。

ちょうど鍵のあるあたりから、湧き上がる熱は力の様で、俺の体に充満していく。

力チ

なにかのはまる音がした。

「またね。お姫様」

頭にくる言葉を最後に、俺は意識を手放した。

プロローグ？（後書き）

今回も短めです。
じゃないとストックが…

プロローグ？

夢を見た。

最近だ。そう、両親が逝ってしまったすぐの頃。俺がひどく落ち込んで、鬱になつてゐる頃。何度も見た。

今も。

夢は変な夢だった。

俺は自分が生まれる前の幸せそうな両親を上から見つめているのだ。母がとても優しい目をして自らのお腹を撫でる。父もまた穏やかな視線でそれを見つめる。

俺の願望の世界。

こうであつてほしかつた、続いてほしかつた世界。夢は決まってこれで終わる。幸せを噛み締めて終わつてしまつ。ただ、今回は別だつた。

「もういなもの追い求めるのか。意味はないだろ？？」
声は思念しかない俺に語りかけてきた。

姿はない。ましてや声で判断出来ない。ただ連なる音のよつだ。

「未練か？」

無言を通した。それで伝わると思つた。

「他に大切なものは？」

「ない」

俺の即答に、声は憐れみを乗せて続ける。

「なら、別にこの世界に未練はないんだな世界。口の中で反復して、確認する。

大きなものが来たな。でも、

「無い、な」

俺にとって世界なんて、もうどこも同じだ。あの夫婦から逃げ出

せるなら、冥土にだつていつてやる。

「じゃあ、いいよな」

何が、とは聞かなかつた。何となくわかつたから。

俺はあまり考えなかつた。必要がなかつた。

「いいよ」

視界が開けた。

フツと意識が浮上する。開けた視界の先は見慣れぬ天井、否、様々な装飾の施された薄いカーテンが波打つてゐる、これは…？

俺は起き上ると周囲を確認する。

何処か、西洋貴族のベッドルームを思わせる。透き通るよつた青を基調とした清楚な部屋。

その中でも特段目立つだらうキングサイズのベッドに俺は寝かされていたようだ。

ベッドのお姫様が寝ていそうな、ヒラヒラのレースの施されたもの。水色と白のグラデーションは涼しさを感じさせてくれる。

あれ、そういえば少し体がほてつてゐる気がする。寝ていたからだろうか。

俺はこの短時間で起きた様々なことを振り返つてみることにした。まず、帰り道にマリモに拉致られて、意識飛ばして目覚めたら、鳥籠ん中から美形軍団を見上げる状況に。あれはホントに羞恥ブレイだつた。それに恐ろしかつた。まだ恐怖が残つてゐる。

思い出してしまつたことで恐怖がよみがえる。俺は両手で小刻みに震える肩を抱いた。

今このこの場所だつて、俺は知らない。何も知らないんだ。

キイ、と音がした。

俺は反射的に扉のあつた方に顔を向けた。右手前にある両開きの扉はかすかに開かれていた。と、開いた空白からあの時の、好青年が顔を出した。

彼は、俺を見て柔らかく微笑むと、此方へと歩み寄つてきた。

「お田覚めでしたか。急で申し訳ありませんが、陛下がお会いしたいと仰っております」

「え…？」

陛下。陛下つていうのはやはり一国を治める王様のことだらうか。だとしたら、ここはお城か。

言葉が通じる時点で此処は地球のどこかではないのだろうな。日本には天皇はいるが、陛下と呼ばれる人物はいないはずだ。つまり。族に言つあれだ。

異世界トリップ。

だからさつきの声は、きっとこれの予兆。俺に戻らなくてもいいかの確認。

でも、大体の異世界トリップつてものは戻れるもんなんじやないのか？元の世界に戻るための方法を探る。それが主だつた目的になるんじやないだらうか。

「辰巳様？」

「は、はいっ！」

考え込んでしまつていた俺の田の前に、いつの間にか好青年の不安げな顔が。俺は驚いて後ろにのけぞりながら慌てて返事をした。

「参りましょう」

「・・・はい」

俺は言われるがまま、ベッドから降りて好青年の後に続いた。

まあ、どうせ陛下とやらが説明してくれるだらう。なんか知つていつうだし。

プロローグ？（後書き）

辰巳君は察しがいいです。
あと理解。
ばっさりしてるから。

プロローグ？（前書き）

わわっ！

なんと6件もお気に入り登録が！

もう、なんて言うか

ありがとうございます！

こんな素人の文を読んでくださつて！！

活動報告もやつてるんでよかつたよ（（殴

……本文どうぞ

プロローグ？

案内されたのは一際纖細な装飾の施された両開きの大扉の前だつた。これまで続いていた、ベージュとくすんだオレンジの壁に茶色の扉と言う組み合わせではなく、赤と金色の豪勢な扉。変わらない壁に挟まれて少し浮いてしまつてゐる。

なるほど、ここに陛下がいるのか。やけに派手な訳だ。

好青年がコンコンとドアをノックする。すると示し合わせたかのように内側から扉が開いた。ギィイとあまりよろしくない音を立てて開いた扉の向こうは、またしても赤い。正確には白い大理石の様な床の上にレッドカーペットが敷いてあり、赤い壁の合間に黄色い円柱型の柱が立つてゐるのだ。

失礼しますと一礼して歩を進めた好青年に倣つて、一礼し後を追う。

…正面にいるあのイケメンさんは例の陛下だらうか。最上段にある金色の椅子に腰かけて、こちらを見て微笑んでいる。さつきの帽子男とは違うタイプで美しい人だ。帽子男を大人の色氣のある美形とするなら、彼はさわやかな空気を醸し出す若々しい美形さんだ。ああ、嫌な奴を引き合いに出してしまつた。

氣を紛らわそうと少し周りを観察してみる。

兵士とかでたくさん人がいるかと思ったが、それでもないようだ。陛下だらう人物の横にはこれまた超絶に綺麗な女性がいる。奥さんだらうか。綺麗な金髪はカールしてクルクル巻かれていて（用語なんて俺は知らない）、目が行つちやつて困るぐらいグラマラスな体型をしてらつしやる。男の目にはよろしくない。

そして反対側には、陛下ほどではないがジャニーズに入るだろうイケメンがいる。まだ幼い顔つきに見えるから、多分俺とそう年齢は変わらないだらう。それから、壇の上ではない俺達と同じ高さ

のところに、さつき見た長髪の女性がいる。しなやかに垂れ下る青みがかった黒い髪は、腰に届きそうだ。彼女も遠田では分からなかつたがきつめの美人。…そのきつい田でこじらをあまり見つめないでほしいが。

「お待たせいたしました、陛下。こじらが例の瀬川辰巳です」

あれ、俺名乗つた覚えないんだけど。

「御苦労。瀬川辰巳だな。こちらの都合で気苦労をかけてすまない。今の状況はどのくらい呑み込めている?」

「あ…えっと、こじらが俺の知らないところつて言つことじらいで…」急に笑顔が向けられて混乱してしまつ。もしかして俺つて美形に弱いのかな。俺男なんだけど、別に憧れはおかしくないよな?

「そうか、うん、そうだな。まだ何も説明していないからな。ではこれから私の口から説明しようと思う。長くなるから場所を変えよう。立つたまではきついだろう」

陛下はそういうと立ち上がり、後ろの一人を引き連れて壇を下り、俺の横をすぎて扉へと向かってしまった。行動が早いというか急と言つた。軽く礼をして後に続いた好青年に続いて俺も後を追つた。

通されたのはこれまた大きな部屋だった。さつきのドーム型の講堂の様な所とは違い立方体の様な空間。そこにぽつんと大きな長机が置かれている。もちろん純白のテーブルクロスつき。

「無礼講だ。皆こちらに座れ」

陛下が長机を縦に一望できる席に腰を下ろすと俺をその斜め手前に促した。俺の隣にまた一礼して好青年が着き、その隣に同じく一礼して長髪の女性が着いた。俺と好青年の向かえ側にはそれぞれグラマラスな美女とイケメンが座る。

「まず、わたしはこのセプテリア王国の王、ヴァランだ。ヴァラン・ファリスアーナとい。まあ、ヴァランと呼べ」

「セプテリア王国…ヴァラン、陛下、ですね」

たぶん、これから覚えてはいけないことだと思うから、反復

して頭にインプットした。血塊じやないが暗記は結構得意なんだ。

そうしているとヴァラン陛下に苦笑いで返された。

「陛下などつけなくともよいのだが、まあ周りの者はそう呼ぶからな。そしてこれらがわたしの妻だ」

そう言って陛下が指示したのは迎えに座っている一人。

「ん？ 一人？ 確かにこれらって言つたけど、妻とも言つたよな？ 片方イケメン君ですよ。」

「第一妻のメリッサと第一妻のゼンだ。…どうした、固まって？」

「…少し、驚いただけです。…俺のいた国では妻は一人だけでしたし、同性婚も認められていませんでした。ましては王もいませんでしたし。…それらのある国もありましたが、俺は国を出たことはなかつたので」

ヴァラン陛下から田を離さずに言つた。俺の話に逆に驚かれてしまったようだ。陛下はわざかに田を見開いている。周りからも同じような気配を感じる。

異国、なんだと改めて思った。まさか自分がこんな“非”現実的な体験をしようとは。

「…そういえば元の世界で、俺は神隠し的な扱いをされるんだろうか。」

「…それは、まあ、世界が違えばいろいろだからな。…この国、いや世界だな、では恋愛事はいたつて自由だ。性別など関係はない。ついでに複数の妻を持つことが許されているのは王である私だけだ。これから過ごしてもうひとつ当たつてその辺の常識も必要になつて来るだろうな。そのあたりは置いておくことにしよう。ひとまず現状確認だ」

「…思考が完全に反れていた。危ない危ない。

…ってか俺話すらしちゃつてるじやん。いや、でもしょうがなくな
い？ まじめに驚いたし。

「辰巳、お前の中には『神力箱』と呼ばれる力の塊がある。神の力の箱と書くのだが、その名の通り神の力を納めたものだ。これはあくまで世界神話の話だが、『創造神がこの世界を創造した際に神は世界の安定を見守り保つために“はざま”へと身を置いた。』……“はざま”というのは不安定でわたしたちの世界の中核となっている場所を指すのだが、私達はそれがどこにあるのかさえ掴んではいな。だが、それに関する古い文献や、それに近い場所などは発見されていて、調査も行われている。……『神は力を使わなくとも時を経るごとに湧き上がつてくる。そうなるといつしか満杯になってしまうときがある。そうなると世界のバランスが崩れてしまう。それに危機を感じた神が己の力を注ぎこんだ力の塊を、別世界へと飛ばしてしまおうと考えた。飛ばされた力はその世界の何らかの生物に取り込まれ、稀に異能を發揮するという。』……わたしたちは別世界へなど行くすべを持たないからこの神話を確認したことはないが、この現代まで信じられてきた。実際こうして辰巳がここにいるのだから実在するのだろう。世界を渡ったのだからな。なにか、自分に不思議な能力があると思つたことはないか？」

ヴァラン陛下は一度そこで切ると俺の目を見据えた。

正直、あつた。でも、気のせいだと思つていた。普通そう思つだろう？

俺は頷いた。

ヴァラン陛下も頷いてくれた。

「問題はここからだ。実在するという事実をどうやってか突き止めたやつら…辰巳をこの世界に連れてきたあいつらだ。『黒蝶の騎士』なんて名乗つているがこれまでいくつかの聖地を荒らしている如何わしい奴らだ。何が目的かは知らんが力を欲しているらしい。そこで『一神力箱 じんりょくばこ』に手をつけたのだから…何が、されなかつたか？」

何か？

瞬間、俺の内に熱がともる。熱い。覚えのある感覚に、背筋が冷

える。

無意識にワイスシャツの胸元をわしづみにした。

内から湧き上がる熱と力を強制的に抑え込んで、ギュッと力を込める。

「どうした？」

「なんでもないです。あの、鍵って分かりますか？」

「鍵？」

ヴァラン陛下は「」に手をあてて考へて居る風な仕草をすねと、ハツとして俺に視線を戻した。

わざとらしく見えるけど…素っぽいな。

「もしかして、辰巳自身にわしたのか？」

「はい」

「まわしたのか」

「と詰めつか回されました」

部屋に重い空気が流れ始める。俺、まずい」と詰つたかな?いや、言つたよね。絶対よくない代物だよね、あれ。

「…平氣か?」

「へ?」

「体だ。それは辰巳の中に眠つていた力を開放する鍵だろ?。彼らが神話の中だけのその鍵を手に入れたと聞いた」

心鬱な表情で詰つヴァラン陛下に、隠し事はしてはいけないような気がした。

「…熱い、です。何かが内から湧き上がって来るつで。…でも、どうにか抑え込んでるんで、大丈夫です」

そういうと、ヴァラン陛下は田をこつぱいに広げる。ほんとに変なこと言つただろうか。

「抑え込んでいるん、ですか?」

そう言つたのは俺の横に座つていた好青年。彼もまた驚きに田を見張つているようだつた。

ほんとに俺変なこと言つたかな。

「・・・なんとか」

「初めから力の制御が出来るのか。すじいな。しかしガ手ほどじきをする必要がなくて助かる。…では最後に、これからのことについて話そう」

今一度仕切りなおしたヴァラン陛下に向き直り、真剣に聞く体制になる。

「もう君は帰れない」

潔く告げられた真実に、わずかに顔がこわばる。でも、分かつていたと言えば分っていたことだ。

俺は、それを受け入れたのだから。

「やつらは辰巳を狙つてくるだろう。ここに匿つてもいいんだが、それではこれからこの世界で生活していく君にはとても不便だろう。それにわたし達としても君の存在は公にはしたくない。幸い奴らはここにしばらくは手を出してこないはずだ。儀式をするための装置を、君を奪還した時に少し壊せたからな。準備にはそこそこかかるはずだ。そこで、辰巳には一般的な学校に通つてもらおうと思つたんだ。学校等の制度は元の世界ではあつたか？学ぶ場所なんだが」

「はい。俺も高等学校に通つていました」

「よかつた。不思議なものだ。それから、一般的な常識や、基礎能力の向上、および身の回りの世話のために彼をつける。まあ、家庭教師兼護衛と思つてくれ。…私達王族との繋がりは極秘で頼むよ」

そう言ってヴァラン陛下は俺の隣の好青年を指し示す。彼はさわやかすまいる全開で目があつた俺に笑いかけた。

「うわ イケメンがそんなことしたら女子いじりだらうつな。

「よろしくお願ひします。辰巳様」

「あ、こちらこそ。よろしくお願ひします」

俺が慌てて頭を下げるが、彼はまたもや微笑んだ。

プロローグ？ 終（前書き）

お久しぶりです（^_^;
やっと一話に入れます。

あのあと少し学校について聞きながら好青年 センサス・イズクスさんと、これから一人で住むことになる場所へと移動した。彼によると、俺の通う学校は基本的な制度は変わらないが、細かなところは違いが多い。まずは一週間（七日）の内六日間学校だといつこと。曜日感覚は同じだが休みは日曜だけらしい。その代わりか、45分授業で毎日五校時。これは嬉しい。こうなると部活の無いものは（部活という概念も同じ）2時15分には帰れる。部活も最高で5時まで、元の世界と比べると2時間近く早く帰れる。まあ俺は部活してなかつたけど。それでも早く帰れることは好ましい。どうやらこの世界では日が短いらしい。午前6時に昇った日登つた日は、午後4時には完全に沈んでしまう。

科目は元の世界にもあった国語、数学、理科（生物と物理）、社会、体育の他に魔法実技、魔法工学があり、外国語と魔法倫理の選択、家庭科と保健の選択がある。

うう…気がめいる。内容が同じだったらしいのに。魔法なんて分かんないぞ。

どうやら彼はその学校の卒業生らしく、いろいろ話を聞いているうちに目的地へと到着した。なるべく一般的で、なおかつ不自由しない場所と云つことで、これから通う学校近くの高層集合住宅マンションのことでの一室を与えられた。内装はいたつて普通で、備えられている家具も元の世界となんら変わらない。違つところと言えば、電気やガスなどが無く、全て魔法でまかなわれているということだろうか。なんでも、電化製品ならぬ魔動装置と言つらしく、中はメカニカルな部品が埋め尽くされているのではなく、複雑な魔法陣と式とが張り巡らされているのだそうだ。メカニカルな部分が全くないわけではないが。

さつき聞いた学校の説明の捕捉で、なんとセプテリア王国唯一の男子校らしい。まあ、この世界はその辺の区分をしてもあんまり意味は無いらしいが。元の世界で言うホモの割合は半端なく多いことが予想されるな。男も女の関係無いんだらうけど。なぜかヴァラン陛下から気をつけろと言われたけど、俺社交性ないし、大人しくしてればこんな奴目立たないよね。

あと彼は、学力も平均的で、特に特質したところもない学校だと言っていた。学力方面は一から学ばなくてはならないことを考えるに落ちこぼれそうだけど。仕方ないと思つ。うん。め入つても仕方がない！

「辰巳様？」

「へ？ あ、はい！」

振りかえついたら考え込んでいたよつだ。

そしてセンサスさん？なぜそんなに近くにいるんだい。びっくりして仰け反つちゃつたじやないか。

「他に必要なものなどありませんか？」

「大丈夫です。こんなに服も『えてもらひちゃつて…十分すぎるくらいです。ありがとうございます』

「いえいえ。お客様ですから。敬語も使わなくていいんですよ？」

「いや、それは無理ですよ！ 年上の、しかも一国の騎士様に！」

そう。なぜ彼が俺を助けてくれて、しかも世話まで焼いてくれているのか。気になつた俺は尋ねた。直球にね。

その答えが、一国の騎士様だということ。この国では“騎士”と呼ばれるのはほんの一握りの剣士で、その中でも『王宮騎士』といふのは、陛下の側近の様なもので身の回りの世話も焼くらしい。それで世話にも慣れていて、尚且つ強いセンサスさんが俺の世話係に抜擢されたらしい。因みに名前は有名だけど顔は見せていないので、偽名を使えばばれないそうだ。

「それは困りましたね…。これから俺たちは一応“兄弟”って言つことになりますから」

一番シンプルだからね。そうなつた。でも、なら余計にセンサスさんが俺に敬語つて…。

「兄が弟に敬語使うのもおかしいと思いません」

「そとでは使わないようにしますよ」

「…だつたら、お互に敬語なしにしませんか? おあいこでじょう?」

「ですが…」

「違和感があつてかないません。俺も敬語使わない方がいいんでしょ?」

俺はセンサスさんが言い終わる前に言つた。

「…いうとき俺つて譲らないんだよね。」

「…わかりました」

「…」

「わかつた。辰巳」

俺はにっこり笑つた。優しいな、センサス。

「ありがと。俺は偽名の方で呼んだ方がいいの?」

「そうだね。その方がいいと思つ」

「了解。…えつと、どうするの?」

「セカンドネームは辰巳のを使おう。うーん、そうだな…・イ
ズでいいよ。俺のセカンドネーム」

「イ・ズ・瀬川になるの?…ははつ、芸人見たい」

「笑うのかよ!…」

堪え切れずに大声で笑い出した俺に慌てたようににっこりこんできた
イ・ズは、なんだか気取つてない気がして、嬉しくなつた。これか
ら長い付き合いになるんだから、素でいいこうな。

1 転入ですか。？（前書き）

やつと一話田です。プロローグ長かった…

そしてなんと、お気に入り登録が一桁に…！

へへへへへへ*

ありがとうございますー！

がんばっておしゃれ展開を田指しますーー！

1 転入ですか。？

あれから一週間ほどたつた。時期が微妙（ちょうど長期休暇にあたつたらしい）だったため、休みが明けるまで転入はお預けで、それまでイズにさまざまなことを教わった。

まず一安心したのは勉強で落ちこぼれる心配が軽くなつたということか。

イズに教わったのももちろんだが、なぜだか元の世界と似通つているのも理由の一つだ。数学なんて、この魔法の世界で何に使うのかと思うが、こちらの高等学校で中学一年生程度の物を教えてい。だから、する必要はない。分かるから。これでも俺結構成績良かつたし。第一高一だし。受験は乗り越えているのさ！

因みにこの世界には受験は無いらしい。高校まで義務教育で、大学は高校から特定の大学に入ることが出来るようになつていて。自己申請らしいが、拒否されることはあり得ないそうだ。大体一つの高校に3～4校の大学が帰属していて、高校を選ぶときに大学もほとんど決めてしまう。すごいことだ。俺なんか高一にもなつて、まだ進路迷つてたんだから。…もう関係ないか。学力はその学校のテストの平均と余所の学校のテストの平均の比較だ。

…元に戻るが、あとは国語。絶望的だと思っていたのに、なぜか日本語。これはホントに驚いた。まったく同じなのだ。皆の名前がカタカナなのは単純に文化の違いらしい。文法とか漢字とか現代文とか古文とか漢文とか、なんら変わらない。あと理科もおなじ。生物の名前とかが違うのがいるだけ。

そして二つあつた選択教科は、家庭科と外国語を選んだ。料理とか裁縫とかは得意じゃないけど苦手じゃないし。嫌いじゃないんだよね。そして、外国語は、まさかのまさかで英語でした！どうやら日本とアメリカの立場が逆転した感じなんだよね。世界の共通語が

セプテリア語（俺からしたら日本語）で次に使つていい国が多いのがアナリア語（英語）。だから選択で選べたらしい。そしてやつぱりレベル的に中学校。楽な方を選んだのさ。

そうなると歴史や国の仕組みに関する社会と、魔法系の授業だけが問題となる。

この一週間で中学生レベルに届くかどうかあたりまでやつたが、まだまだ危ない。赤点とりそうだ。

魔法に至つては初体験。子供でも出来るという魔法を一からやつてているから、実技の授業をどうやってこまかそうか、今から画策している。

まあ、その場合はサボればいいかとも思つてているけど。成績良かつたけどまじめじやないから、俺。

そんなこんなで勉強ばつかしてたような気がする一週間を終えて、本日、始業式と同時に俺の異世界生活本格始動なわけです。

家が近いため見慣れぬ道を地図を頼りに歩く。

あまり近くない生徒は『空間移動』を使って学校付近までやつて来る。学校内部まで入るのは校則違反なんだそうだ。

『空間移動』^{テレポート}は媒体を使って行つ魔法だ。この世界の魔法は一種類ある。媒体に式を組み込んで行つ“媒体魔法”と素手と頭の中の式だけで行つ“素体魔法”。前者は基本的に高度な魔法を使う場合が多く、後者は実用的なものが多い。『空間移動』^{テレポート}も例外に無く高度なもの。どうやら結構な魔力を消耗するらしい。だから、媒体に魔力をためてそれを使うのが一般的だそうだ。

俺もその媒体を渡された。青い水晶みたいなブレスレットだ。この特殊な水晶の中に魔力をためるらしい。俺のにはイ・ズが念のためとつて緊急用の通信機能と発信機がついている。ほら、一応俺を守られてる立場だから。

そういう考えているうちに地図にある曲がり角に。

石やレンガ造りの家や商店らしき建物を横目に見ながら、既に気

の置けない仲のイ・ズに出がけに言われた言葉をふと思い出す。

『あんまし目立つな……って行つても無理だろ? から、まあ、気を

つけるよ。色んな意味で』

……意味が分からぬ。意味がわからぬすぎて頭に引っかかるつてしまつた。……三点リーダーの数だけ勝つてみる。

目立たないの無理つて、俺はあんたみみたいにイケメンじやないんだよイ・ズさん?

うわ、落ち込むわ。

一人爵になりかけていると前方にはそれらしい建物が。ブロック塀に囲まれた高い校舎と針葉樹を見上げていると、人の声が聞こえて右側を向いた。数人の生徒が塀に吸い込まれていく。あそこが校門か。

しかし、今遠目から見た生徒達。顔よろしくていらっしゃる方が多かつたんだけど。

俺、隅っこで小さくなつてよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0142x/>

神の力の箱ですか。

2011年10月8日23時20分発行